

賜物に性による差はあるかとの

問い (Gender or Giftedness) をめぐって

禁令を聞いたのが誰であるかを釈義的に考察する

稲垣 緋紗子

一 序論

教職論において、賜物に性による差はあるかとの問いかけがなされることがあり、その問いかけをめぐる論議に關わりとして挙げられる聖書箇所は少なくない。本稿において、そのような箇所のうちの二つを釈義的に取り上げる。⁽¹⁾ 論議に入る前に言及しておくべきであると思われるのは、この国で、福音主義に立つ教派、教団によって、女性がすでにいわゆる按手を受け、聖礼典の執行を許されている例は少ないとは言えないということである。何十年に渡る

歴史の中ではかなりの数にも及び、そのような女性の教職者たちによって、実際に職責が果たされているという事実はしっかりと受けとめられるべきものである。また、教職者として女性が任命を受けるといふことの意義が、福音主義に立つ群においてなおいっそう確認されていくべきである。そのために、本稿がその一助となることを願う。

さて、教職論において、賜物に性による差はあるかと問われ続ける根底には、女性という性を持つ者が、教会において、男性という性を持つ者を含む会衆を教え、指導し、聖礼典を執行する立場を与えられるかとの問いが含まれると見られる。その論議に関連すると思われる聖書箇所の代表的なもの一つが、創世記二章一六、一七節である。この箇所では神からの禁令を聞くからである。一六、一七節の禁令は単なる禁止にとどまらず、許可をも含んでおり、人としてのいのちに関わる重要な教えである。「園のどの木からでも思いのまま食べてよい」という大枠の中で、一本の木についての禁止条項が言われるのを、人は落ちついた気持ちで聞くことができたであろう。守らなければ「必ず死ぬ」との警告をしっかりと心に刻んだと考えられる。そこで、その場において神の教えを聞いたのが男だけであって、そこに女は居合わせなかったと受けとめることは、しばしば当然のこととして行われてきた。もし、最初の「人」として記されているのが男であったとすれば、それは、男がまず最初に造られたということの意味するにとどまらず、かりに、男だけが存在していた時というものがあって、その時に、男が神から直々に教えを受けたということも考えられることになる。したがって、そこに教育上の秩序があったと認める余地が残されることにもなる。しかし、この箇所に登場する最初の「人」は総称としての「人」であり、したがって、禁令を聞いた最初の「人」が男だけであったとは言われていないと見る立場もある。そこで、もし、神からの命令を聞いた中に男も女も含まれていたと見るなら、男と女の双方が同時に神からの教えを受けたと考えられ、どちらかが先に教えを受けたという差を認める余地は残らないことになる。

どちらの捉え方をするかは、最も基本的なところで教職論に少なからぬ影響を与えられると思われる。なぜなら、神からの命令を聞くことに関して、最初に造られた男の場合がいわば神からの直伝であるのに対し、最初に造られた女の場合が間接的であると見ることは、神からの教えを受けることにおける序列のようなものを、男と女の間に見定めることにつながる可能性があるからである。

そこで、たとえば、新約聖書で、「アダムが初めに造られ」と言われた後に、「アダムは惑わされなかったが女は惑わされた」と続くことから、エバが禁令を神から直接にでなく、アダムを通して教えられていたために、サタンに欺かれる余地を残していたと受けとめて、パウロはエベソの女たちに、人を教える前にはまず教えを受けるようにと命じたと解釈する立場がある。この論理が現代の教職論において実践に移される場合があるとして、実際にどのようなことが起こるかと言えば、女性はどこまで教育を受けたなら、教職者としての立場を与えられるに十分であると評価されるのかという、困難な問題に突き当たる。しかし、もし、二章一六、一七節で男女双方が神から直接教えを受けたと捉えるなら、この箇所が、そのような問題や困難を生じる序列の想定をする根拠にはなりえない。

禁令を聞いたのが誰であるかを考察することに、以上のような意義を認めることができる。そこで、その考察の鍵となるのは、禁令が与えられた際の状況の検証である。その検証は、二章一六、一七節が、置かれた文脈に従って釈義されることを通してなされるはずである。本稿では創世記二章四、二五節を、ヘブル語 *hebrew* の用法、及びヘブル語動詞を中心とする段落構成という視点から検証し、禁令が記述される一六、一七節がどのように位置づけられるかを見ることとする。

二 創造の記述における「人」という語の用法

総称としての「人」の創造

ヘブル語 'adam' が「人」をさして使われる際、'pe'ani が文法上は男性であっても、指示対象は男女共通 (common) である場合がある。'pe'ani が出ていけば、それが男女共通の、人の総称としての「人」をさすか、それとも男をさしているのかを文脈に照らして見極めなければならない。そこで、たとえば、創世記二章一八節で、「人が独りであるのは良くない。向き合って援ける者を造ろう」と言われるとき、その 'adam' 「人」は、だれをさしているであろうか。人の総称としての人 (human being) であろうか、男性である人 (man) であろうか。ここは総称としての「人」であるのか、男であるのかと、問う必要のない表現として使われている可能性が大きい。もし、「独りであるのは良くない」と記述される段階で男・女の区別に触れているとすると、かりに女が造られていなかった時点というものがあって、そのときの「人」は男であると言えるかと問う余地を残してしまう。そのような問いが生じるのは理に合わないことである。したがって、一八節での記述は、男・女の別そのものを言う段階にはないと見て、一八節の 'adam' は、総称としての「人」をさしていると捉えるべきであろう。

翻って、創世記一章二六、二七節の場合には、'pe'ani は「人」、つまり男女共通の「人」、あるいは総称としての「人」をさすことが明らかである。二七節では男・女の区別にも触れており、男も女も神のかたちに造られたと言っている。「人」を「男と女とに」造ったと言ひ、その「人」を「彼ら」(複数)と言っている。つまり、「人」を男女両性具有に造ったのではなく、男として、あるいは女として造ったのである。男を造ることをまず考え、後になって

女を造ることを思い立ったといつことでもない。人を初めから男と女とに造ったのである。

その創世記一章二六、二七節の記述を受けて、創世記二章で「人(総称)」の創造が再び取り上げられている。その視点は、さきに触れた一八節まで続いていると見られる。したがって、禁令の語られる二章一六、一七節は、総称としての「人」の創造の記述の段階に置かれていると見られる。そのことは、禁令が総称としての「人」に向けて語られたものであることを示唆している。つまり、禁令を男も女も聞いていたと見るのが可能である。

男・女としての「人」の創造(向き合って援ける者の創造)

ここで、男・女という場合、男が造られ、女が造られて初めて、男は男であった、女は女であったということが言える。そうしたときに初めて対ということが言える。そのような意味での、男・女としての「人」の創造が取り上げられて、詳しく語られるのは一八、二五節においてである。二〇節を見ると、二〇b節の「アダムには、向き合って援ける者はいなかった」(傍点の箇所は筆者の訳による) という文の 'adam' に冠詞がついていない。つまり、二〇b節の 'pe'ani から、固有名詞である 'pe'ani についての記述が始まると思われることが可能である。創世記二章の人間の創造に関する記述は、二〇b節で視点が新しくなると捉えることができる。男性であるアダムについての言及への移行は、二〇b節からであると思われる。

では、「アダムには、向き合って援ける者はいなかった」と言われる前に、一八、二〇a節が置かれていること、このどのような意義があるであろうか。一八、二〇a節は一八節で言った、'ezer kenegedо' 「向き合って援ける者」という概念の説明として置かれていると見ることができ、「援ける者」 'ezer' は旧約聖書において、神が 'ezer yamut と語られる際に「助け」と訳されている) 出一八・四、申三三・七、二六、一六、一七、一八、一八、二〇、二一、二二、二七、

六、八九・二〇、一一五・九一〇、一一一、一一二・一、二二・二四・八、一四六・五)。「援ける者」は、いかなる意味においても弱さを意味するとはではない。N・M・サルナが指摘するように、「一段低い存在をさすことばでありえない」⁽³⁾。「はしきり」前「あめ」の ("that which is conspicuous, in full view of, in front of")⁽⁴⁾。この意味を *wa neged* を伴う *ke'eneq'edô* は「彼に注目して 回答する」 ("to what is in front of = corresponding to")⁽⁵⁾。この意味で言われている。したがって *'ezer ke'eneq'edô* は *く・p・ハミルトン* が指摘するように、すべて「相対する関係にあり、対等で十分な援ける者をさして言われている」⁽⁶⁾。つまり、一九節で動物が来ることにより、まず、*'ezer ke'eneq'edô* は *はしきり* のものではないかが明らかになれる。動物は援ける者にならない。意図された *'ezer ke'eneq'edô* / *すなわち* 人格的釣り合いと *はしきり* からすれば、*'ezer ke'eneq'edô* は結局は動物ではありえない。人に對しては人が「向き合って援ける者」である⁽⁷⁾。そのことが明らかになれるために一九、二〇a 節は置かれている。

三 段落の連鎖に見るへブル語動詞の用法

そこでつぎに、一八節の冒頭にあるへブル語の *wa* をどのよう理解するかが問われる。*wa* を、「その後」を指す接続詞と見て、「その後」「神が」「人がひとりであるのは良くない」と言ったといふように捉えると、一六、一七節で総称としての「人」に禁令が語られたことを受けた後に、つまり、男も女も禁令を聞いた「その後」に、向き合って援ける者の創造がなされたと続くことになり、事の前後関係を正しく受けとめることができず。しかし、実際には一八節冒頭の *wa* は、語りの進展を担うへブル語動詞に組み込まれた *wa* として捉えられるべきものである。そこで、

本稿第三章ではへブル語動詞による段落の連鎖構造を見、続く第四章で、段落の積み重ねによる記述の進展ぶりを捉えることとする。それによって、禁令が語られる段落の位置づけを検証する。すなわち、語りの進展を支えるへブル語動詞の形という視座からの位置づけである。

談話の段階での段落の構成単位

そこでまず、段落の構成単位を見ることとする。これについては諸説があるが、本稿では、明示された主語を伴う *waYYIQTOL* と *へブル語動詞* の形式が現れることにより、段落の構成単位としての新しいユニットが始まるものと見られる⁽⁸⁾。そのユニット内では、通常明示された主語が、ユニット内の一連の *waYYIQTOL* に伴って、共通の主語として共有される⁽⁹⁾。つまり、各ユニットの冒頭には *waYYIQTOL* が現れ、その次に明示された主語が現れる。へブル語では主語についての情報を動詞の活用形をもって示すことも可能だが、ユニットの開始にあたっては、それとは別に *wa* を独立の名詞を立てることにより主語を明示している。この *wa* が述べる段落の単位は、段落を文の複合という観点から設定する、いわば文の段階での段落の単位ではない。文の段階を越えた、談話 (discourse) の段階での、段落 (paragraph) の単位としてのユニットである。(創世記一章四・三五節を構成する全ユニットは、そこに現れる *waYYIQTOL* を表示しつつ、また、明示された主語はブロック体で表示しつつ、本稿巻末の テキストに提示されている。)

ユニット内では、*waYYIQTOL* の連続 *waYYIQTOL* 「*waYYIQTOL*……*waYYIQTOL*」と *waYYIQTOL* の行為 (action) が語られる。創世記一章四・三五節を例に取るならば、*waYYIQTOL* 主権を持った行為者である「神である主」を、主語として明示する *waYYIQTOL* *waYYIQTOL* 新創造ユニットが始まる。その *waYYIQTOL* 各ユニット内では「神である主」による一連の行為

が wayyiqtol に語られる⁽¹⁾。すなわち「*וַיִּבְרָא אֱלֹהִים*」と「*וַיִּבְרָא אֱלֹהִים*」の *wayyiqtol* 連続、また、ある場合 *וַיִּבְרָא*「*וַיִּבְרָא*」と「*וַיִּבְרָא*」の *wayyiqtol* が *וַיִּבְרָא* の *וַיִּבְרָא* を構成する。一八節の冒頭はそのような *וַיִּבְרָא* の始まりとなっている。したがって一八節を「その後仰せられた。神である主は、『人がひとりであるのは……』のようにつまみ捉えるのではなく、『仰せられた。神である主は、『人がひとりであるのは……』のようにつまみ捉えるのが、冒頭の *וַיִּבְרָא* の用法を踏まえた捉え方である。冒頭の *וַיִּבְרָא* は「その後」を *וַיִּבְרָא* の *וַיִּבְרָא* *wayyiqtol* の *וַיִּבְרָא* である。

段落の内部構造から段落連鎖の構造へ

そこで次に、二章四〜二五節の全体がどのような段落連鎖を示しているかを明らかにしていくための前段階として、段落の内部構造と段落連鎖の構造との関連に注目したい。その例を、創世記二章と一章との関わりを論議する際にしばしば取り上げられる、二章一八、一九節の記述に見ることとする。一九節で「神である主が……野の獣と……空の鳥を形造って……人のところに連れて来られた」と記される。そのことと、創世記一章での出来事の時間的順序との間に「矛盾」が存在すると見られることがある。その「矛盾」を解決するために、「あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造って」という表現のところに大過去 (*pluperfect*) を認める立場もある。すでに形造っていたのだが、それを連れて来た」と解釈するのである。しかし、二章一九節はむしろ創世記一章の記述を前提として書かれていると見るべきである。創世記一章から二章へと、遠近法的な展開（視野の変換としてのクロスアップ）⁽¹²⁾ をして語られる人間の創造については、ある意味で「順序が違つ」あるいは「順序が違っていない」ということ自体が、著者の意識にないのかもしれない。しかし、たとえ著者にそのような意識がないにしても、二章一八、一九節の記述が創世記一

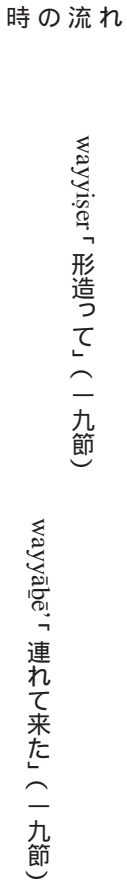
章の記述を前提としたものである⁽¹³⁾とは、段落の内部構造と段落を越える構造との関わりが明らかにされる中で、確認することができる。段落の単位をなしている一九節の中に、一八節、一九節という、段落連鎖の段階での構造を反映した、語り特有の構造が見られるからである。

一八節 (*וַיִּבְרָא אֱלֹהִים*) によって成りたつ段落である。本稿巻末の テキスト を参照) では、神である主が、*wayyōmer*「仰せられた」と言われ、一九節 (*וַיִּבְרָא אֱלֹהִים*) によって成りたつ。本稿巻末の テキスト を参照) に「*וַיִּבְרָא אֱלֹהִים*」は、神である主が *wayyiser*… *wayyābē*「形造つて……連れて来た」といふ *wayyiqtol* 連続が見られる。「形造つて……連れて来た」といふ事実が、「形造つて……連れて来た」といふ順序でひとまとまりにされる。「連れて来た」ということが起こる前に、「形造つた」ということがあったと確認しつつ、九点は「連れて来た」のほかに置かれる。つまり、語りの流れは、「仰せられて」(一八節)、「それで」連れて来た「(一九節)である。「Aして……Bした」(C) 形造つて……連れて来た」(D) という連続のうち、九点は B (D) に置かれて語りが進展するのである。こうして見ると、記述の進展を捉える視点は、段落と段落との関係だけでなく、段落の内部構造を把握する際の鍵ともなることが理解される。

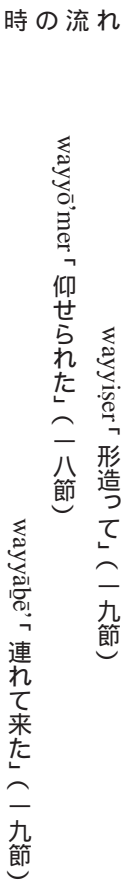
出来事の時間的な順序と記述の流れ

一方、出来事の時間的な流れは次のようである。「仰せられた」(一八節)とあるずっと前に、動物を「形造つた」(一九節)。つまり、「形造つた」「仰せられた」「連れて来た」が、出来事の順である。以下の図一、図二で、垂直方向は記述の流れを示し、水平方向は出来事の時間的順序を示す。図一は一九節という段落の構造を、図二は一八節一九節という段落連鎖の構造を提示したものである。

図一 (ユニットA4 = 一九節)
記述の流れ



図二 (ユニットA3 ユニットA4 = 一八節 一九節)
記述の流れ



ユニットA4 (図一) だけを視野に入れるのであれば、出来事の時間的順序は「形造って」「連れて来た」であり、記述の流れもその順である。しかし、ユニットA3 ユニットA4 (図二) という連鎖では、記述の流れからすれば「仰せられた」が先であっても、時の流れでは「形造って」が先行している。記述の流れと時の流れで順が異なるの

である。つまり、語り手は「仰せられた」とあるA3 (一八節) を受け、A4 (一九節) の「連れて来た」を語るようにして、「仰せられた」よりも時間的には前に起こった「形造って」から語りだしているのである。⁴⁾

段落の起点における自由な語りだし

へブル語ではユニットA3があらたまるwa'yaq'ol 一連のwayyiq'tol wa'yaq'ol その都度新たに「wa'yaq'ol... wa'yaq'ol」した、あるいは「wa'yaq'ol」wa'yaq'ol... wa'yaq'ol」など語り直すことが可能である。ユニットA4 (一九節) も直前のユニットA3 (一八節) に対して、出来事の時間的順序については自由に語りだしている。時の流れが、記述の流れの中ではそのような形で表されることは、言語における時制といふことは区別して検証され捉えられることである。その検証自体が、言わば時制といふ概念を、語りといふ談話 (discourse) の段階での事柄として捉えることである。⁵⁾ 故にユニットA3はwayyiq'tol 連鎖の起点を、その時点の事柄に置くと捉えることも可能である。もちろん、いったん語りだしたユニット内部のwayyiq'tol 連鎖に限ってみれば、そこでは文字通りの時間的、論理的順序に従って記述される。しかしユニット相互の間となると、その連鎖の関係は必ずしも一様ではない。通常は時間的な順に従っているにしても、基本的には詳述の度を増していく進展であることを見ることが出来る。

四 詳述への移行と展開

では、創世記二章四〜二五節を構成する各段落は、どのような記述の積み重ねをしているであろうか。後半の一八

二五節における、男・女としての「人」の創造（向き合って援ける者の創造）の詳述の積み重ねについてはすでに触れた。そこで本章では、とくに、四一七節の、総称として人の創造の記述の部分を中心に、各段落における記述の進展を検証する。（以下、段落の単位である各ユニットをA1、A2、……、B1、B2、……などで示す。）それによつて、二章四二五節全体がどのような構成を示すものであるかが明らかにされるはずである。

出来事への先行部分、また、問題提起としての四一六節

津村氏が指摘するように、まずこの箇所、開墾の対象とならない *sade*「野」と、耕作の対象となる *adama*「土地」について、その状況が語られる。*sade* は、神が雨を降らせなかったために、「不毛で、植物が見られない」。一方、*adama*のほうには、地から水が湧きだしてはいるが、「土地を耕す人がいない」。その二点が、以後の記述に向けた問題状況として提起されている。¹⁶⁾

人を造り、園に置く　舞台の移行＝四一六節　七節　八節

出来事への先行部分では、「地」と言われる中での「野」と「土地」について、それぞれの問題が言われていたが、その後、記述のポイントは「野」ではなく「土地」に絞られる。つまり、創造の舞台は、*eres*「地」（四一五節）*adama*「土地」（四一七節）*eden*「エデン」（八節）*gan*「園」（八節）へと移行していく。G・カステリーノは、*eres* は、はるかに見渡すことができる地の全面であり、*adama* は人の管轄範囲になりうる地（*sade* がこれに対立する）であるとする¹⁷⁾。一方、*eden* は、水の豊かな所であり、その、水の豊かな所から *gan* を造るのが、人のために園を造るといふことである。

「設け……置いた」　七節（A1）から八節（A2）への展開

八節（B1）では、時間的、論理的な一続きとして、*wayyitia*……*wayyaseu*「設け、置かれた」と言っている。直前の七節（A1）の、「人を形造り……息を吹き込まれた」という、時間的、論理的な一続きを前提として、それに積み重ねる形で、「園を設け……人を置かれた」と、いわば自由に語り直している。したがって、神が園を人の住める状態に整えた後に、人を園に置いたと見るべきである。園が造られるまで、人が宙に浮く形で存在していたと示唆されているのではないことは明らかである。著者が、園と人との関係を語る新しいユニットを、「園を設け」と語りだすとき、その視点は新しくなっている。その新しい視点で、「設け……置かれた」と時間的流れに従って語っている。

土地と人との密接な関係　八節（B1）から九節（B2）への展開

八節と同様のことは次の九節（B2）の場合にも言える。ここから園の木の記述に入るが、八節で園はすでに園としての条件を満たし、木は生えていたはずである。だが、視点をあらためたうえで、新しく「木を生えさせた」から語りだしている。しかも、八節が、先行の七節との間に、視点は改めても密接な関係を示すように、九節もまた先行の八節と密接な関係をもつて続いていると見られる。主なる神は、「見るからに好ましく、食べるのに良いすべの木を」、園の外の *adama* ではなく、園の中の *adama* から生えさせた。*eden* に *gan* を造って人を置いた「その土地」から、つまり、*gan* の中の土地から生えさせた。すなわち、人間が置かれる環境の中で生えるようにしたということである。

耕し守る者として置いた 八、九節 (B1、B2) から一五、一七節 (B3、B4) へ B3 (一五節) の「人を取り、園に置き……」を、B1 (八節) の「園を設け……人を置いた」の同義的表現と見て、それをもって川に関する記述 (一〇、一四節) という、いわば脱線の部分の終りと捉える立場がある。しかし K・A・キッチンのように、五、一七節全体に統一性を認める立場もある。キッチンは、五、七節、八節、九、一四節、一五、一七節が、一貫して、人の置かれた舞台である園と、そこでの人の役割と仕事を、詳しく増しつつ語り進めている (specify with increasing detail) と見る⁽¹⁸⁾。いずれにせよ、この箇所には、いわゆる創造神話の語り (四b、七節、九a節、一五節、一八、二四節) と、楽園神話の語り (八節、九b節、一六、一七節) の混在を想定することとはしないのである。八節で、七節を想起する形で、「形造った人を」と言われていたが、ここでは、何をするためとまでは言われていない。一五節になって初めて、耕し、守るためと言われる。つまり、一五節は八節の単純な繰り返しではない。「人を置き」までは八節と同じであるが、そこから先は意図的に違うことばを用いて、さらに詳しく語り進めている。

「川」 九節と一五節との間に登場した新しい主題

一〇、一四節で、川という新しい主題 (genre) が導入された。それは、九a節に対しては、図三で示されるように、二段構えになった随伴部分の中にある⁽¹⁹⁾。

図三

(園の記述)	九a節	……………	すべての木をはえさせた	……………
(木の記述)	九b節	……………	二本の木	……………
(川の記述)	一〇、一四節	……………	川	……………

人間にとつての距離という点で、川は木よりも一段と背景 (background) に退く。人間はいのちの水を飲むことによつてでなく、善悪の知識の木の実を食べないことによつて生きる者である。しかし、川に関する記述もまた大切な背景である。創世記の記述が作り話ではなく、ある地理的状況を想定しつるものであることを示唆するものとなっている。

川の記述をはさんで進展する詳述

川の記述の前にある、八節 (B1) 九a b節 (B2) の連鎖と、川の記述の後にある、一五節 (B3) 一六、一七節 (B4) の連鎖との間には類似が認められる。B1では、神が園を設け、そこに人を置いたことが語られ、続くB2の初めの九a b節で、「食べるのに良いすべての木」及び園の中央の二本の木について語られる。一〇、一四節に及ぶ川の記述 (背景の記述) をはさんだ後、今度はB3で、神が人を園に置き、耕させ守らせたことが言われ、続くB4で、どの木からでも食べてよいことと、ある一本の木からは食べてはならないことが言われる。つまり、どちらの連鎖にも共通して見られることは、図四で示すように、神が園に人を置いたことへの言及の次には、木に関

する記述が来ることである。

図四

- B 1 神である主が園を設け、そこに人を置いた。（神が造った人と、園との関係）
- B 2 「食べるのに良いすべての木」（木に関する記述）
園の中央の二本の木について。（木に関する記述）
 - 「川に関する記述＝背景の記述」
- B 3 神である主が人を園に置き、耕させ、守らせた。（神が造った人と、園との関係）
- B 4 どの木からでも食べてよい。（木に関する記述）
 - 善悪の知識の木からは食べてはならない。（木に関する記述）

また、B 1 に対して、B 3 では、神が人を園に置いた目的が語られるという点での進展があるように、B 2 に対し、B 4 では、善悪の知識の木（園の中央の二本の木のうちの片方）に関する禁令が語られるという点での進展が見られる。

随伴部の後で新しくなる視野

B 2 と B 3 の間に挟み込まれる川の記述を、A・ニッカーツイは B 3（一五節）への先行部と見る⁽²⁰⁾。それに対し

て、F・I・アンダーセンのように、川の記述を、B 2 での随伴と見る立場がある⁽²¹⁾。B 1、B 2 においては、川に関する記述に至るまでの間に、八節では人と園の関係へ、九節では園の土地から生えた木へ、さらに、一〇節では木よりも一段と背景的な川へと、視点がなだらかに移行している。したがって、川に関する記述は、B 3、B 4 への先行と見るよりも、B 1、B 2 への随伴と見るほうが落ちつきがよいと考えられる。

詳述への進展に見られる入れ子構造

人と園との関係の記述（八～一七節＝B 1～B 4）が、総称としての「人」の創造の記述（二章四～七節＝A 1、A 2）に、落ちつきよく随伴することは、創造の舞台の移行についての説明の項で触れたとおりである。随伴部の後で、視野は大きく絞り込まれて、男・女としての「人」の創造（一八～二五節＝A 3～A 9）が詳述される。

そこで、四～二五節全体を見渡せば、図五に示すように、詳述への進展での二重構造を認めることができる。まず、総称としての「人」の創造の記述（A）に、人と園との関係についての記述（B、B'）が随伴し、その後、男・女としての「人」の創造・向き合って援ける者の創造の詳述（A'）が続く。そこには、（A）（B）（B'）（A'）という交差構造が見られる。また、（B、B'）のうち（B）（B'）には、川に関する記述（C）が随伴するため、（B、B'）もまた（B）（C）（B'）という交差構造になっている。つまり、B C B' という記述の進展が、A B C B' A' という交差構造が認められる。

- A 総称としての「人」の創造の記述 (A 1、A 2)
- B 人と園との関係についての記述 (B 1、B 2)
- C 川に関する記述 (B への随伴)
- A' 男・女としての「人」の創造 向き合って援ける者の創造 の詳述 新視点より (A 3、A 9)
- B' 人と園との関係についての記述 新視点より (B 3、B 4)

五 結び

以上の検証から明らかなのは、神が人に与えた禁令についての記述(創世記二章一六、一七節)が、総称としての「人」の創造の記述に付随する箇所に見れることである。また、総称としての「人」の創造の記述の後に来る、男・女としての「人」の創造の記述が、出来事の時間的順に従ってであるよりは、詳述への進展として現れることである。つまり、禁令が語られた後に、男・女としての「人」の創造があったというようには捉えられないのである。禁令は総称としての「人」に語られ、したがって、その場には男も女もいたということが示唆される。つまり、神が禁令を語ったときにそれを聞いたのは誰であったかと問われるなら、それに対する答えは、「男も女も禁令を聞いた」である。そこで、二章一六、一七節において、神との交わりの本質に関わる教えを、神から与えられる立場にいた

が男であり、また、女であったと捉えることができるのであるから、二章一六、一七節が、神から教えを受けるといふことに関しての、性による差や序列を示唆する箇所ではありえないということが言える。そのことが、教職論において、神からの教えを受け、教え、指導し、聖礼典を執行する立場に誰が置かれるべきかが論じられる際に持つ意義は、深く認識されるべきであると思われる。教職論に関わると見られている他の聖書箇所⁽²²⁾についても、積義的な検証及び考察が重ねられることが望まれる。聖書は、女性が説教したり、聖礼典を執行したりするのを妨げる障壁となるような箇所を、果たして有しているのかが検証されるべきであろう。

テキスト

傍線を付した語は括弧内の waYYIQTOL の日本語訳である。ヘブル語テキストの waYYIQTOL は各行の行頭に來ている。

(総称としての「人」の創造を記述)

- 4a これは、天と地が創造されたときの経緯である。
- 4b 神である主が地と天を造られたとき、
- 5a 地には、まだ一本の野の灌木もなく、
- 5b まだ一本の野の草も芽を出していなかった。

- 5c それは、神である主が地上に雨を降らせなかったからである。
- 5d 土地を耕す人は、いなかった。
- 6a ただ、水が地から湧き出し、
- 6b 土地の全面を潤していた。

A
1

7 神である主は、土地のちりて人を形造り、(wayyāser)
その鼻にいのちの息を吹き込まれた。(wayyipah)

A
2 (神の行為の結果)

人は生きものとなった。(way'eh)

(神が造った人と、園との関係)

B
1

8 神である主は、東の方エデンに園を設け、(wayyita)
そこに(神である主の)形造った人を置かれた。(wayyāsem)

(園の記述)

B
2

9a 神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を
生えさせた。(wayyasmah)

(木の記述)

9b いのちの木と、善悪の知識の木が園の中央にあった。

(川の記述)

- 10 一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分れて、四つの源となっ
ていた。
 - 11 第一のものの名は「ション」で、それはヒラの全土を巡って流れ、そこには金があった。
 - 12 その地の金は、良質で、また、そこには、ブドラフとじまめのつみもある。
 - 13 第二の川の名は「ギホン」で、クシユの全土を巡って流れる。
 - 14 第三の川の名は「テケル」で、それはアシュルの東を流れる。
- 第四の川、それはユーフラテスである。

B
3

15 神である主は、人を取り、(wayyikah)
エデンの園に置き、そのを耕わせ、そのを守らせた。(wayyannah)

B 4 |

16 神である主は、人に命じて仰せられた。(wayyō'saw) 「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。」

17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

(男・女としての「人」の創造 向き合って援ける者の創造 を詳述)

A 3 |

18 神である主は仰せられた。(wayyō'imer)

「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼/彼女に、彼/彼女に向き合って援ける者を造らう。」

A 4 |

19 神である主は、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造って。(wayyiser)

それにどんな名を(人が)つけるかを見るために、人のところに連れて来られた。(wayyabe')

人が生き物につける名は、みな、それがその名となった。

A 5 | (人の応答)

20 人は、すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣の名をつけた。(wayyikra')

アダムには、向き合って援ける者は見つからなかった。

A 6 |

21 神である主は、深い眠りを人に下された。(wayyapei)

(人は) 眠じた。(wayyisān)

(神である主は) 彼のあばら骨の一塊を取って。(wayyikah)

その人間の肉をふたがれた。(wayyisgol)

A 7 |

22 神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ。(wayyiben)

彼女を人のところに連れて来られた。(wae'bi'eha)

A 8 | (人の応答)

23 人は言じた。(wayyō'imer)

「これは、今や、私の骨からの骨。私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」

24 それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合ひ、ふたりは一体となるのである。

A9 (人とその妻の状況)
 25 人とその妻はふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしくいと思わなかった。(wayyih'e'vā)

注

- (1) この論文は、稲垣絳紗子「創造の記述における段落構成と語りの進展」『エウセジエティカ』第七号（聖書釈義研究会一九九六年）五二〜八三頁（全四章）の、第一章「段落内部の構造と段落を越える構造」及び第三章「(創世記)一章四-二五節の段落構成に見られる構造」を中心に要約し、加筆したものである。
- (2) ZHは二〇節の 'ādām から固有名詞に切り替えて「マダム」と訳している。それまでのUJRNの 'ādām は総称として、普通名詞の「人 (the man)」と訳している。新改訳は二〇節の 'ādām を「adam」と訳す。新共同訳は後半の 'ādām を「自分」と訳し、判断を避けている点に同意である。
- (3) N. M. Sarna, *The JPS Torah Commentary: Genesis* (Philadelphia/New York/Jerusalem: The Jewish Publication Society, 1989), p.21. 参考抄。
- (4) S. Terrien, *Till the Heart Sings* (Philadelphia: Fortress, 1985), p.11. V. P. Hamilton, *The Book of Genesis chs. 1-17* (Grand Rapids: Eerdmans, 1990), p.175. 参考抄。
- (5) F. Brown, S. R. Driver & C. A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* Oxford: Clarendon, 1907. "אָדָם" p.617 参考抄。

- (6) Hamilton, *The Book of Genesis chs. 1-17*, p.175. 参考抄。
- (7) 人に対しては人が「向かい合う援ける者」であるところ(UJ)を、W. Vogel's は、彼の論文の題「人 (Mensch)」がひとりであるのは認けない。わたしは彼／彼女のために彼／彼女にふさわしい援ける者を造るの、から示唆されるUJであるが、男／女については女が、女／女として男が「向かい合う援ける者」であるを捉えている。Vogel's は、男／女は「אָדָם」が女が造られたと記された後の二二三節UJを、男／女は現れていると捉えて、初めに造られた者を、男／女と捉えるUJは適切ではないところ、単に「人」と捉えるべきである。また 'ādām は、後には固有名詞として用いられては、二二三節までの所で、男／女も総称としての「人」を指す。W. Vogel's, "It is not Good that the 'Mensch' should be alone: I Will Make Him/Her a Helper Fit for Him/Her," *Eglise et Théologie* 9 (1978), pp.9-35. Mary J. Evans, *Woman in the Bible* (Exeter: Paternoster Press, 1992), p.143.) など、Vogel's が「二人節」の「彼のため」に彼／女にふさわしい援ける者を、とはなく「彼／彼女の」ために彼／彼女にふさわしい援ける者を、と訳しているのは、<二二三節>の「彼」を指す接尾辞 (waw) が表れている。「彼女」を指す場合もあるが、必ずしも表われない。
- (8) F. I. Andersen, *The Sentence in Biblical Hebrew* (The Hague/Paris: Mouton, 1974), p.64. 又、D. T. Tsumura, *The Earth and the Waters in Genesis 1 and 2: A Linguistic Investigation* (JSOTS 83; Sheffield: JSOT Press, 1989), p.119. は、UJの文脈である。
- (9) wayyiqtol は、<二二三節>の waw consecutive + imperfect 形式による。
- (10) waw は、その unit の中で、動詞の活用形による単語の轉換が見られる。
- (11) 同一の unit 内の wayyiqtol 連続の中で、明示された単語を共有しない場合もある。つまり、途中で単語の轉換を伴う場合もある。たとえば二二三節の「眠りをとった」のは主なる神であるが、その次の「かれは眠った」の主語は「人」である。次の wayyiqtol から、また、主語は主なる神である。
- (12) J. E. Grimes が記述の展開法の一つとして挙げる「視野の変換 (scope change)」及びその一例である「クローズアップ (zooming in)」のことについては、J. E. Grimes, *The Thread of Discourse* (The Hague: Mouton, 1975, 1984), pp.46-47. 参考抄。

- (13) H・ウマン・D・バルナックは、聖書の記述は基本的に聴覚に訴えるものであることを指摘する。(H. van D. Parunak, "Some Axioms for Literary Architecture," *Sermons* 8 (1982), pp.2-4を参照せよ。) 創世記1章を耳にする聴者も一章の創造の内容をすべて聞いてくる。一章一九節は「形造りて……連れ来た」と言われれば、聴き手はそれを、一章の語りに基礎を置いた、時間的、論理的に連続のものとして受け止めるはずである。N・M・サルナは、創世記2章の記述が、一章ですべてに語られたことの多くを前提としてこのことを指摘している。サルナによれば、一章は一章とまごたく別の創造記事などではない。一章はむしろかた言えば単独では不完全なものである。一章に見られる主要な概念は、一章では別の語の口びを二度繰り返すことである。その例として、主権者である創造者である神が存在する「ユ」その神が目的をすべて世界を造った「ユ」その頂点に人間の創造がある「ユ」などがある。(Sarna, *JPS Torah Commentary: Genesis*, p.16, 参照せよ。)
- (14) 言語「ユ」は、時制 (tense) を含む表現として過去を非過去だけがある「ユ」今と未来としての時制を区別する「ユ」その表現形式をすべて表す。その際、たとえば現在を表すに未来を表すに「ユ」同じ形が用いられる「ユ」が生じる。つまり、動詞が、言語の形として時制を表現する形である「ユ」がなつて、時間としての抽象的感覚が、「今」を基準として空面的に時、後戻りして「ユ」を捉えらる。
- (15) 従来、時制の問題は動詞の形だけから考えられてきたが、最近では、たとえば談話の段階での perfect と何かが「ユ」の「ユ」が問われる「ユ」がある。
- (16) Tsumura, *Earth and Waters in Genesis 1 and 2*, p.88, 参照せよ。
- (17) G. Castellino, "The Origins of Civilization according to Biblical and Cuneiform Texts," in R. S. Hess & D. T. Tsumura (eds.), / *Studied Inscriptions from Before the Flood: Ancient Near Eastern, Literary, and Linguistic Approaches to Genesis 1-11* (SBTS 4; Winona Lake: Eisenbrauns, 1994), pp.79-81, 参照せよ。
- (18) K. A. Kitchen, "Pentateuchal Criticism and Interpretation: Notes of three lectures given at the Annual Conference of the Theological Students' Fellowship, held at the Hayes, Swanwick, Derbyshire from December 27 to 31, 1965." (University of Liverpool), p.7, 参照せよ。

よ。

- (19) R・E・ロングフーカーは、聖書の記事に、語り、預言、説明、勧告奨励としての四種の談話を認めるが、そのうち語りの預言、勧告奨励は「ユ」筋を抽出し階層の動詞「ユ」背景情報を抽出し階層の動詞があるとする。たとえば、語りの談話の筋を抽出した waw-consecutive 動詞「ユ」その第一級の背景情報を抽出した perfect 動詞「ユ」である。(R. E. Longacre, *Joseph: A Story of Divine Providence - A Text Theoretical and Textlinguistic Analysis of Genesis 37, and 39-48* (Winona Lake: Eisenbrauns, 1989), p.82, 参照せよ。) しかしながら、創世記1章四〜五節は「ユ」ニハトマーにおける大量の先行部分としての顕著な四〜六節は「ユ」も、ニハトマーにおける、これもまた大量の随伴部分である九〜一四節は「ユ」も、付加部分に waw-x-qatal (qatal は「ユ」語の perfect を示す「ユ」) waw-x-ha、文頭の「ユ」の直後に「ユ」すなわち動詞以外のものが来る場合を「ユ」以外の形が用いられる。巻末のテキストで「ユ」字分として引いた部分だが、説明の付加である。四〜六節は「ユ」一四節は「ユ」それは「ユ」二四節は「ユ」である。
- (20) A. Niccacci, *The Syntax of the Verb in Classical Hebrew Prose*, trans. W. G. E. Watson (JSOTS 86; Sheffield: JSOT Press, 1990, 1986[orig.]), p.39, 参照せよ。
- (21) Andersen, *Sentence in Biblical Hebrew*, p.79, 参照せよ。
- (22) 世界福音同盟女性委員会に提出された資料としては、A4版八八頁のうち三六頁を、旧約八箇所と新約三〇箇所の釈義で占めたいのが刊行された「ユ」。男が女とともに神のかたちを造られたゆえに、賜物に性による差はないとの結論に導かれた画期的な「ユ」(Marilyn B. (Lim) Smith, *Gender or Giftedness: A challenge to rethink the basis for leadership within the Christian community, a study on the role of women prepared for the Commission of Women's Concerns of the World Evangelical Fellowship*, 1997.) 本稿の題「ユ」の真実の書は「ユ」た Gender or Giftedness「ユ」の「ユ」の方を用いた。

(筆者は一九九九年よりアジア福音同盟女性委員)